

而して「兎狩ニ要スルモノ」として記されてゐる中に、「職員並ニ生徒トモ凡貳百人」、「唐辛午后ノ休息二百斤金三十六錢 酒壹樽五圓」等が遺つてゐる。

四 提 灯 行 列

熊本に於ける提灯行列の嚆矢

明治二十七年三月九日に舉行せられた 天皇皇后兩陛下大婚滿二十五年奉祝や、その夜行はれた提灯行列に就いては、既に述べて置いたが、熊本に於ける提灯行列の嚆矢を爲せる意味に於て、更に一言するの必要を感じる。それに關しては、大正十五年十二月二十五日發行第二百號特輯記念號所録、隈本繁吉氏の「龍南の上古史を辿りて」の一文を引用して見れば、

(前略) 明治天皇御大婚二十五年の祝典、所謂銀婚式を擧はせらるゝ事となり、我五高に於ても提灯行列を行ひ奉祝の誠意を表したのであるが、之は今から思へば何でもないやうであるが、其當時では實際非常に骨の折れた問題であつた。當時の總理大臣は伊藤伯(後の公爵)外務大臣は陸奥氏(後の伯爵)で、外交軟弱の聲が頗る高く、それで、御大婚二十五年の奉祝も、政府が國民の心持を轉換する爲だと唱ふる向もあり、甚しきは西洋風の銀婚式などは、我國柄として、如何かといふ風に書き立てる新聞紙もあつたやうである。又今でこそ提灯行列は何等新しきものではないが、當時は頗るハイカラのものにも思はれたのである。概ね九州人のみにて固められ寧ろ保守的と銘打たれたる其頃の五高として、而も前陳の如き雰圍氣が濃厚に漂ひたる熊本にて、提灯行列により奉祝の誠意を表するといふのは、破天荒の企てであつたのである。實際此「銀婚式」に對する全國の重立てる學校——今日よりも學校の數は固より非常に少いのであるが——の奉祝方に就ても、提灯

行列をなすのは、新聞紙の所報に依れば、第一高等中學校のみで、他には右様の催しがないうやうであつた。

云々

此の熊本に先鞭をつけた催しは、一部人士の非難もあつたらうけれども、到る處拍手喝采を以て迎へられ、「高等中學萬歳を連呼するもの幾千人ぞと私語した」と、第二十五號にも記してある。記者は又、

(前略) 何物の醉漢ぞ、肅然たる隊伍を横ざらんとしたるものありしが、憐れなる醉漢は堀君一個唱の下に投げ去られ、復び起ちて抗する能はざりしは笑止なりき。

と述べてゐる。肅然たる隊伍とは、社會に對する責任上から考へても、強ち自畫自讚ではなかつたであらう。而してその醉漢の暴舉も、單なる惡戯からか、それともこの行に對する反感からかは、知る由もないのである。

而してその後幾度か催されたのは言ふまでもないが、一々記す必要もないことである。

五 栽 樹 會

愛校精神の發露

亭々として聳ゆる幾百となき松樹や、本門より中門までの道路の左右の櫻樹や、植物園内の草木などに就いては、曩にも一言した通りであるが、職員生徒舉つての愛校の精神の現れの一つとして、更めて栽樹會のことを記して置きたい。

栽樹會の起源

栽樹會のことは、明治二十九年乃至三十年の本校一覽にも掲げてある通り、二十八年二月、その發會式を擧げたのであるが、今その第五高等學校栽樹會規則(醫學部ヲ除ク)第一條を案するに、「本會ハ第五高等學校職員生徒及本校ニ緣故アルモノヲ以テ組織シ校内ニ樹木ヲ栽培スルヲ以テ目的トス」とあり、會務を總理する所の會頭